

はし が き

本書は、進化論と社会の関係を主題として京都大学人文科学研究所で行なった共同研究の成果報告書である。『種の起原』の刊行以来、ダーウィンの進化論は世界のさまざまな国と社会に強い影響を及ぼしてきた。その影響力の大きさは、巻末に付したダーウィニズム関連年表からも知ることができよう。じつさい、『種の起原』と『人間の由来』はさまざまな言語に翻訳され、ダーウィニズムにかんする論評はおびただしい量に上っているのである。

『種の起原』は、生物種の不変性を前提とし、種の分類をこととしていた従来の博物学にかわって、生物個体の偶然の変異と自然選択による有利な変異の保存という原理にもとづく種の進化というダイナミックな理解によつて、生物学のパラダイムを変革した。

しかしダーウィンの進化論は生物学の理論であるだけではなかった。それは、神による個々の種の創造というヨーロッパで支配的だった生物観・自然観にかわつて、種の進化とその自然自体による説明という新しい生物観・自然観を提起したからである。マルクスはこの点に注目して、『種の起原』を目的論によらない自然史として高く評価したのだった。

自然科学の理論も世界観にもとづき、また新しい世界観を提起するけれども、ダーウィニズムにおいてはこのことはとくに顕著であり、直接的であった。ダーウィニズムは生物進化の理論、生物の歴史にかんする理論であ

るが、人間も生物である以上、人間の社会と文化の歴史もその射程に含まれているからである。こうして、神によって保証されていた人間の位置は揺るがされ、「自然における人間の位置」という問題、自然と文化の関係という重要で難しい問題が新しい地平で提起されることになった。ダーウィン自身、『人間の由来』でこの問題に取り組み、「ダーウィンのブルドッグ」と評されたハクスリーは、自然選択の支配する「宇宙過程」と文化の特質である「倫理過程」を区別し対立させた。ウィルソンは社会生物学による人文科学と自然科学の統合を主張し、ドーキンスはミームの概念によって文化の多様性と歴史的变化を生物進化と同型の過程と見なす仮説を提起した。ダーウィニズムの立場に立つ生物学者がこの問題を取り上げたのは当然といえようが、この問題は事柄の本性からして、人文科学者、社会科学者をも巻き込まずにはいかなかった。ダーウィニズムが不可避的にはらむ世界観・人間観こそ、ダーウィニズムの強い影響力の重要な要因であり、積極的な受容と反発の原因であろう。

他方、一九世紀末の多くの人文・社会学者は、ダーウィニズムに新しいモデルと方法論を見出した。生物学、進化論のアナロジは力学のアナロジに代わる有力な武器だと考えられたのである。その適用の具体的様相は本書の諸論文を見ていただきたい。本書で取り上げることができなかったが、アウグスト・シュライヒャーは生体と言語のあいだに成立するアナロジに注目し、インドヨーロッパ語の分化の系統樹を作成した。ウィリアム・ジェームズは、人間の心的能力が環境への適応によって発達したと考えて、進化心理学を構想した。もちろんデュルケムのように生物学のアナロジに批判的な社会学者もあり、進化論のアナロジが誤解や逸脱をもたらしただけでも、『種の起原』刊行以来、人文・社会科学は進化論の問題圏を無視することはできなくなった。

さらにダーウィニズムは、学問の領域を越えて直接に政治的・社会的な言説としても登場した。社会ダーウィニズムとして知られる主張である。しかし社会ダーウィニズムと総称される主張の内容は、自由放任主義、個人の解放、人種主義、帝国主義、相互扶助、階級闘争など、論者によってきわめて多様であり、一つの確定した政

治的・社会的イデオロギーと見なすことはできない。また、社会ダーウィニズムにおいては、進化論のアナロジーは、多くの場合、問題発見ないし理論構築の機能を果たすのではなく、説得の道具として機能している。それは、論者が自己の主張をダーウィンの名によって、生物学という権威によって正当化し普及させるためのレトリックにすぎず、アナロジーによる誤解や歪曲をとめないがちであることに注意することが必要であろう。

このようにダーウィニズムは、人文・社会科学やイデオロギーにたいして強い浸透力をもった。しかしそのことは、ダーウィンの進化論が確立された理論であることを意味するのではない。ダーウィンはラマルクの進化論を完全に退けたわけではないし、『種の起原』の初版で自然選択に過度の意義を与えたことをのちに反省している。また『人間の由来』では性選択や群選択の仮説を導入した。要するに、ダーウィンの進化論は確立された理論ではなかったのである。他方では、ハーバート・スペンサーの哲学から心理学・社会学を包括する進化的体系がよく読まれ大きな力をもっていた。当時ダーウィンの名前を冠して語られた進化論は必ずしもダーウィンのものではない要素を含む複合体であった。その後も、ヴァイスマンによる獲得形質の遺伝の否定、メンデルの法則の再発見、一九三〇年代から四〇年代にかけての進化総合説、ゲールドとエルドリッジの断続平衡説、一九七〇年代から八〇年代の性選択の再発見などを契機として、ダーウィニズムはたえざる変化をとげてきた。このようにダーウィニズムは生物学の理論としても、他の領域への適用においても変化しつづけてきた。本書に「変異するダーウィニズム」といういささか耳慣れないタイトルを付した所以である。

『種の起原』の刊行百周年を迎えた一九五九年をきっかけに、ダーウィンの進化論にかんするさまざまな資料の刊行、大量の書簡を含む浩瀚なダーウィン全集の刊行が始まった。他方では、ゲールドやボウラーらの優れた啓蒙書によって、ダーウィニズムは人々の関心を集めている。生物学の領域では、分子生物学と集団遺伝学の飛躍的發展に支えられて、ダーウィニズムはかつてないほどの力を獲得した。ヒトゲノムの解読の進行とともに、

優生学的発想の回帰も見られる。また認知科学や情報理論の進展が心理学、経済学、人類学などへのダーウニズムの新たな適用を生み出している。ダーウニズムは自然科学と人文・社会科学のインターフェイスを構成しているのである。本書はダーウニズムにかんする思想史的・社会史的研究であるが、ダーウニズムと社会という問題はけっして過ぎ去った歴史ではなく、現代の問題なのである。私たちはダーウインの進化論の影響力、現代性、学際性に注目し、その具体的様相を明らかにしようとして、この共同研究を始めたのだった。

本書のもとになった共同研究は一九九九年四月から二〇〇二年三月までの三年間にわたって行なわれた。その間、ゲストスピーカーとしてご報告をいただいた、谷泰（滋賀県立大学人間文化学部教授）、西川伸一（京都大学医学研究科教授）、倉谷滋（岡山大学理学部教授）、黒田末寿（滋賀県立大学人間文化学部教授）、市野川容孝（東京大学大学院総合文化研究科助教授）、丹羽太貫（京都大学放射線生物研究センター教授）、河田雅圭（東北大学大学院生命科学研究所教授）の各氏に心からお礼を申し上げる（肩書はいずれも報告当時）。ダーウニズム関連年表や索引などの編集上の仕事は小林博行氏の手をわずらわせた。

この共同研究は人文科学研究所における編者の最後の仕事であり、本書はもともと早く刊行されるはずであったが、編者が共同研究の締め括りにあたる時期に研究所長の任についたことなどのために、大幅に遅れてしまった。早くに原稿を提出いただいた方々にお詫びしなければならない。なお、この研究には、一九九九年には京都大学から教育改善推進費（学長裁量経費）を、二〇〇〇年から二年間文部科学省科学研究費が交付された。記して謝意を表する。

二〇〇三年八月

阪上 孝